

大学と地域の懸け橋に

追手門学院大学 地元商店街に出店

大阪人間科学大 連携スペース設置

実践的教育と地域活性化兼ねる

追手門学院大学（茨木市西安威）が学生チャレンジショップ「追風阪急茨木店」を茨木市の商店街に出店、かなりの客でにぎわっています。学生が運営の中心になって実践的経営を学ぶとともに、地元商店街と連携しながら地域活性化を図る狙い。一方、大阪人間科学大学（摂津市正雀）は商店街の空き店舗に「コミュニティ・スペース」を開設して地域と連携したアートのある街づくりなどに取り組んでいます。文部科学省が大学の教育改革の一環として Good Practice（GP＝優れた取り組み）を全国の大学から募集し、優れたアイデアに補助金を出して支援している事業。地域にどんな風を吹かせることができるか。大学がまちにやってくることで、地元からは期待の声が出ています。



はやりのレンタルボックス（箱貸し）の店。衣類、アクセサリーなど売りたいものを持つ人たちのために、売り場スペースを提供するビジネスで、1ボッ

追手門学院大学

商店街に貸しボックス店オープン

阪急茨木市駅北側の同市で最も古い商店街の一つ、心齋橋商店街。20店舗のうち7店舗が店を閉めシャッター通りに近い状態だったのですが、その中央部に2月初め、追手門学院大学の「チャレンジショップ追風阪急茨木店」（茨木市元町3-5）がオープンしました＝写真左。

クスの賃貸料は月 500 円、中央に並ぶハンガーラックは月 2000 円。近くの主婦などが「売ってほしい」と持ち寄ったアクセサリ、手芸品、雑貨、ゲーム機などがボックス内に、女性用を中心にした衣類がハンガーラックにずらりと並んでいます。



主婦層を中心ににぎわう店内

店の運営管理は、追手門学院大学経営学部、小西一彦教授のゼミの学生たち。スペースの賃料のほか、売れた商品の 10%

を受け取り経営しています。学生は試験や夏休みなどで店に来れない時期があるため、主婦のアルバイト店員がいますが、マーケティングや経理、PR など経営面は小西教授の指導で学生が行います。

ユニークなワイドビジョン。商店街全体を PR

この店の特徴は、店の正面にある「ワイドビジョン」。大きなスクリーンが掛けられ、パソコンとつないだプロジェクターが商店街の各店を紹介しているほか、商店街などのイベント情報も映し出して PR。地域とのつながりを重視しています。スクリーンでは、今後、広告の取れる映像制作にも挑戦してゆく予定です。

主婦らでにぎわう店内

3 月下旬のある日、店をのぞいてみると、かなりののにぎわいを見せていました。春休みのせいか、学生の姿はほとんど見られませんが、主婦たちが商品を買って求めたり、ボックスを借りに来ていました。道が細く、古い店構えが目立つ商店街にあって、新しい風を感じさせます。

店の奥にはまだ 2、3 の部屋があり、将来はここも改装してフリーマーケット、展示室、さらに小さなイベントを開けるようなスペースに利用することを考えています。同大学ではすでに、JR 茨木駅北側の春日商店街内にスポーツシューズを主とした販売ショップ「追風茨木春日店」を開店させており、阪急茨木店は 2 号店ですが、広さは約 3 倍の 50 平米。その後、梅田、神戸にもショップや会話教室をオープンさせました。

文部科学省が推進する大学教育改革の取り組み

この取り組みは、文部科学省が平成 16 年度から推進している大学教育改革の取組支援事業から生まれたもの。これからの時代を担う優れた人材を養成していくことが目的で、優れた取り組みを Good Practice (=GP) として選り出し、同省が財政支援するものです。GP は「現代的教育ニーズ取組支援プログ

ラム（現代 GP）」と「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に分かれ、毎年、全国の国公私立大学から公募し、文部科学省で審査、採択しています。

追手門学院大のプログラムでは、「ワイドビジョン」のユニークな発想が評価され「現代 GP」に選ばれたようです。毎年の予算は約 2400 万円。

小西教授に「追風」を開いた狙いを聞いてみました。

「学生のための、より実践的な教育です。目的は企業家的人材を育てることと地域の活性化に貢献すること。利益を上げることが目的ではありませんが、いわゆる、ボランティアの事業でもありません。経営やマーケティングの理論と一体化した経営の学習機会になれば良いと思っています」。

商店街も歓迎

心斎橋商店会の磯川忠臣会長（「宝寿司」経営）も「空き店舗が多かったのですが、追風の出店で、これまでと違う雰囲気が出ています。商店街全体も人通りが増えました」と喜んでいました。

小西教授は「商店会の会合に呼ばれ、みなさんに歓迎されました。商店街の活性化に期待を寄せる声も高いです」と目を細めていました。



コミュニティ・スペース内で地域活性化などを話し合う大学と地元の人たち

大阪人間科学大学

地域と触れ合う実践的スペースをオープン

一方、大阪人間科学大学は 06 年 11 月、阪急京都線の正雀駅東口からすぐの正雀地区の商店街に「コミュニティ・スペース」（摂津市正雀 1-4-1）をオープンしました。同大学の設置者、学校法人薫英学園のす

ぐそば。

狙いは、大学から飛び出した現場研究の拠点、研究成果発表の場として、地域との結びつきのなかで、学生の実践的な学習力を高めつつ、まちづくりにも貢献してゆこうとするものです。

環境とアートのまちづくり目指す

摂津市唯一の大学である大阪人間科学大では、01 年の開学以来、地域とのつながりを意識したいくつかの取り組みを続けており、平成 18 年度の GP に応募し、「個性的な地域を創生する人材育成プログラム」をテーマに、「環境とアートの街づくり拠点」を作る案を申請し、採択されました。ちなみにこの年は、全国の国公私立大学から 565 件の申請があり、2 割弱の 112 件が採択されて

います。

学生がアートとエコリーダーとして活動

具体的には、学生がアートディレクター、エコリーダーとして活動することで、個性的な地域づくりに貢献できる人材を育てていこうとするプログラムで、住民と共にまちの将来を考える3年間の取り組み。毎年約1000万円の補助金が出ることから、シャッターを閉めていた書店のスペースを借りて、「コミュニティ・スペース」(約50㎡)を開設しました。

すでに、学生たちがレイアウトを考えた住民主催の写真展を開いたり、学生が主体になって正雀の街を紹介する冊子を作成しています。学生たちが協力するだけでなく、主体になって行う取り組みもあります。

3月末にこのスペースを訪れると、134年の歴史を誇る地元、味舌小学校が別の小学校に統合されることになったことから記念誌、DVD作成、校舎の模型作りなどについての打ち合わせ中。夜なのに、PTA、商店街、地元の関係者、教官と学生たちが集まって知恵を出し合っていました。

「地域との共同イベントの場としても利用したい」



学生たちが作ったコミュニティペーパーなど

文部科学省への提案の中心になった一人、同大学大学院、杉本久未子教授は、「私たちの大学の人間科学部に、環境と建築とデザインのコースがありますので、環境とアートのまちづくりを考えました」と言うことです。

昨年から大正川の河川敷や正雀の広場にチューリップの花でアートをつくったり、若者向けの音楽を主体にして「たそがれコンサート」に協賛したり。

さらに、消防団の建物、公園の塀の壁面に

子供たちと一緒に、潤いをもたらす絵を描いてきました。

「このコミュニティ・スペースは地域との共同イベントの会場としても利用してゆきたい。事業は3年間で終わりますが、その後も行政、大学の支援を得て、長く地域活性化につなげていければ、とっております」と話していました。

知の集積地である大学が街に飛び出し、地域の事業者、住民と力を合わせて地道な努力を続けていけば、ユニークな成果が生まれそう。どんな新しい風が吹き出すか注目されるところです。

文 株式会社大阪彩都総合研究所
橋本 剛